

上方落語

下
卷

佐竹昭広 編
三田純一
筑摩書房 版

上方落語

下 卷

昭和四十五年三月三十日 第一刷発行

定価 九〇〇円

編 者 佐竹昭広
三田純一

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京二九一七六五一（代表）

郵便番号一〇一一九一

振替東京四一二三

印刷所 暁印刷

製本所 山晃製本

函・デザイン 落合 茂

(分類) 0376 (製品) 17202 (出版社) 4604

まえがき

編 者

下巻の落語本文の集録にあたっては、次の資料を参考にさせていただいた。御協力をいただいた方がたに厚く謝意を表する。

『』——速記本。○——レコード・放送テープの演者。△——参考にした高座の演者

月宮殿

『上方ばなし』

竜宮界

○桂米朝（朝日放送）

貧乏花見

『上方ばなし』△桂米朝

愛宕山

○桂米朝（朝日放送）

野崎詣り

『上方ばなし』○初代桂春団治（レコード）△三代目桂春団治

池田の牛はめ

○桂春蝶（朝日放送）

正月丁稚

『名作落語全集』（騒人社版）

しの字丁稚

『名作落語全集』（騒人社版）

千両蜜柑

『上方ばなし』△桂文我

腕食い

『上方ばなし』△三代目林家染丸

植木屋娘

『上方』（雑誌）○桂小文枝（朝日放送）

らくだ

三枚起請

親子茶屋

立切れ

軒付け

高津の富

大丸屋騒動

景 清

（はめもの）

『こてん』（関西学院大学古典芸能

研究部編）○四代目桂文団治（朝日

放送）△六代目笑福亭松鶴

『上方ばなし』△橋ノ円都

○桂米朝（朝日放送）△三代目桂

春団治

○橋ノ円都（朝日放送）△桂小文

治

△橋ノ円都

『上方ばなし』△六代目笑福亭松鶴

『名作落語全集』（騒人社版）

△三代目林家染丸

林家トミ・平松元女

上方落語

下卷

目次

旅 III 7

月宮殿……………九

竜宮界……………三

大阪の四季 35

貧乏花見……………七

愛宕山……………五

野崎詣り……………八

阿呆と利口 91

池田の牛ほめ……………三

正月丁稚……………一〇五

しの字丁稚……………一一五

千両蜜柑 二七

腕食い 三六

植木屋娘 二六

らくだ 二五

茶屋ばなし 201

三枚起請 二七

親子茶屋 三九

立切れ 二四

江戸と上方 261

軒付け 二五

高津の富……………三六

大丸屋騒動……………二九四

景 清……………三〇八

対談「上方落語」——解説に代えて——……………三
笑福亭松鶴
三田 純一……………三

上方落語史……………三
前田 勇……………三三

上方語辞典……………三七
前田 勇編……………三七

旅

Ⅲ

月^{げツ}
宮^{きユウ}
殿^{でん}

正しくは『月宮殿星の都』。『旅ネタ』とはいいいながら『地獄八景』などとおなじく、地上の旅ではなく、鰻に連れられて天に上るといふ、奇想天外の構想である。冒頭の、鰻が天に上るくだりは、これだけを独立させて『鰻の天上』として演じられたこともあったらしい。この、鰻を追いかけるおかしさは、上方落語の『鰻屋』、東京落語の『素人鰻』などともほぼ同一で、そのなかでは『鰻の天上』が一番古いのではないかと思われる。作は林家蘭丸、サゲは「江戸の仇を長崎で討つ」という俚諺の『地口落』である。

「オイ、徳やん。なにしてんねン」
「立ってんねン」
「なにして立ってんねン」
「立って立ってんねン」
「けったいな男やなァ。ぼんやりしないな。どや、一杯飲

ましたるか」

「いや、せっかくやけど、やめとくわ。一杯飲まそに懲りてんねン」

「なんでや」

「此間、清やんが一杯飲ますさかい、ついて来い、言いたんや。俺、よろこんでついて行つたんやがナ、天満の十丁目まで来ても、ねっから飲まそと言ひよらん。清やん、飲ますいうて、一体、どこで飲ましてくれんのやいな……いうたらナ。オオ、勘忍してや、うっかり忘れてたんや……いうて、天神橋まで連れて来てナ、橋の下まで降りた所で、さァなにもないけど、ゆっくり飲んでや……言ひよるねン」

「なにをイナ」

「河の水やねン」

「そいでお前、どないしたんや」

「せっかく親切にいうてくれてんのに、断わるいうのも角が立つと思たよってに、両手に掬て十六杯……」

「オイ、そんなもん、飲まないナ」

「清やん、ほんと美味ないナ、いうたら、贅沢いうな、これでも淀川の一筋や……言ひよった」

「なぶられてんねがな。……オイ、俺ら、そんな人の悪いことせへん。飲ますいうたら、ほんまに飲ましたる。

……お前、鰻、食わへんか」

「鰻、大好きや」

「よし。そんなら、ちようどええ。他家から恰好の鰻を、四、五匹、貰たんや。それを肴に灘の生一本ちゅうやつを飲ましたる」

「わぁーッ御馳走やなァ。酒は、やっぱし、灘にかぎる。淀川のンは具合がわるい……」

「あたりまえやがナ。ところで、鰻というやつは料理がちょっとむづかしい。お前、いけるか」

「そら、饗ばれンねやつたら、料理ぐらいせんならんやろ」

「そらありがたい。ホナ料理はお前にまかすさかい、たのむで。さァついといで……さ、入んはれ。この水槽に入れたァる……これや（と、指さす）」

「イヨッ。大けな鰻やなァ……。なるほど、これなら、充分、二人前の肴になるやろ。これを俺が料理すンのやナ。よっしゃ。庖丁に組は（と、見廻して）ア、そこにあるナ。ほんなら、さっそくこの鰻を（と、左右の袖をまくり上げ、両

手をニューッと出して）つかみ上げて（鰻をつかもうとするが逃げられる）……（こんどは反対側へ手をのびして）つかみ……（またも逃げられて）……つか（またしても駄目）清やん、この鰻、ヌルヌルやがな」

「どの鰻かて、ヌルヌルや。お前、鰻の料理したことないのかいな」

「お前とこに、糠と金槌ないか」

「糠と金槌（首をかしげて）……なにすンね」

「このへんへ糠を一面にまいといて、そこい鰻を放り出すねン。鰻が糠だらけになって、滑らんようになったとこをつかまえて、金槌で頭を撲くねン。そうすると動かんようになるやろ。それをブツブツ輪切りにする……」

「そんなじむさい料理があるかいナ。水槽の真ン中で鰻つかまえてと思うさかい、つかまえられへんねン。隅の方へ追い込んで、だましづかみにつかんでみィな」

「ア、なるほど。だましてつかむ……か。よっしゃ（と、指先で水をバシャバシャやりながら）隅ィ行け、隅ィ行け。

……アアうまいこといきよる。ナ、ここでつかまえて思うとまた逃げよる。（人差指と中指の二本をつき出して、水平にこすりながら）ちよっとこう背中を擦ってやるねン。鰻でも

人間でも、氣持のええ部分はいっしょや。えらいええ具合に按摩してくれるなアてなもんや。ホラ、目エつぶって氣持よきそうにしているやろ……。そこで、この手を、こう、だんだん上の方へもって上がるねン。すると、鰻がどう思う……ハハハ首筋も揉んでくれよのかいナ……と思ひやるやろ。そう思わしといて（急に早い口調になつて）不意に首筋をグツと、こうつかむと（が、鰻は逃げる。その逃げて行くのを目で追ひながら）それ……逃げよるやろ。それをこつちの隅イ追ひ込んで、両方の手でこうつかむと……（またもや失敗）そーれ、こう逃げるやろ」

「なアにをしているねン。玄人の真似して、首筋つかもと思ひたかて、そら、あかへん。胴でもなんでも、つかみ上げて、指のあいだから抜けて出よるところを、首筋つかみんかいナ」

「そうやかましい言うたかて、なかなか思うとおりにいかへんがな。胴ならつかめんことないやろ（と、手をのばして、両手で鰻をワシづかみ）コーラ、くそッ。サアつかまえたぞ（が、鰻が前へ前へと逃げるので、両手の拳を交互に前へ重ねながら、身をのり出して）ドッコイショ……コーラ、クソッ……（首は前へ向けたまま、目だけを上下左右に動かして）ちよっと、

前にあるもん、みな、どけといてや……。ウントシヨ……。裏口、開けてんか」

「オイオイ、行くのやないがな（と、あきれて見送りながら）アア裏へ抜けてしまひよつた」

「（なおも鰻と格闘して）アアウントシヨ……なーにを、コーラ……クソッ……アア暑い……」

「アアアあんなとつから戻つて来よる。となりの鶏小屋つぶして、なにすんねンな。コレ、止まりんかいな」

「（顔は相変らず鰻を見たままで）俺が止まりたいがナ。それが止まられへんのや。……（なおも、拳を交互に前へ重ねながら）ウントシヨ……コーラシヨ……それ、前へ出るやろ」

「阿呆やなア。鰻を前方向けるさかい、そうなるねンがナ。上へ向けてみイ」

「サ、それが思うようにならへんのや。上へ……ドッコイシヨと、（ようやく拳一つかんでいた鰻を上へ向け）向いた、向いたッ。アアア、楽になった。歩くのが助かった」

「はじめから、そうしときやええのに……」

「（が、またもや、こんどは鰻が上へ動きはじめる。またまた、手を上へのばしながら）……トシヨ。コーラシヨ。……ア、いかに。こんどは上へ上へ行きよる。ア、しんどい。……コーラ

ショ（と、手をいっぱいにはし、腰を浮かせて）アアもう手がのべへん。（こんどは、顔を上へ向けたまま）ちよつと、梯子^{はし}子、屋根へかけてんか。ウントショ……コラショ……（と、精いっぱいの上がる）

「（それを見上げながら）アアア、とうとう屋根へ上つてしまひよつた」

なかなか、この鰻は、こんな輩^{ぐま}ので、こに合うやつやございまへん。海に千年、池に千年、沼に千年、三千年の劫^{ごう}を経たやつ。時期がきたら天上しようと待ちかまえてたやつでおます。この日は、朝からどんより曇った妙な日和^{ひより}でおました、やがて、雨がポツポツ降り出します。おかしい風が吹いてきたかと思うと、にわかには黒雲が舞い下^{くだ}つて、あたり一面、真ッ暗闇^{くらやみ}……。と、今まで一尺ぐらいやった鰻が、見る間^まに、胴まわり三尺もある大鰻になります。徳さんを、尾オでグルッと巻くなり、折からキリキリッと巻き起つた竜巻ののつて、宙天へビューツ……。〈鳴物、大ドロ。ドロドロドロ……〉途中までまいますと、鰻は、徳さんを連れてては、自分の天上の邪魔になると思^{おも}たもんか、徳さんを放り出しといて、天へ昇つてしまひよつた。

（小拍子で、ボタン）「ア痛ッ。コラッ鰻。無茶なことすな。連れて行かんなら、行かんでもええわい。けど、べつに放^{はな}り出さいでもええやないか（と、ボヤキながら、あたりを見廻す）。サアえらいとこへ放り出されたぞ。一体、こら、どのへんやいな。ア、あんな処^{ところ}から人が来よる。いつぺん、訊^きねてみたら。モシ、ちよつとお訊^きね申しますがナ……」

「わしかいな」

「へエ、さいだす。あの、順慶^{じゆんけい}町の方は、どっちイ行たらよろしおまつしゃろ」

「なんじや、順慶町。……そら、なんじや」

「わたいとこだんね。……順慶町の井池^{どないけ}で……」

「順慶町の井池……。オオそれなら下界やないかい」

「イエ、下界やおまへん。大阪だす」

「サ、それが下界やがな。……しかし、わしは、なんやお前さんに見覚えがあるような気がしてならんのが、お前さんはなんというお方^うじやナ」

「へえ、順慶町井池を、南へ入った西側の路^{みち}地で、箱屋の徳兵衛^{とくべい}いう者^{もの}だす」

「なに、箱屋の徳兵衛。……オオ、ほんにそうじゃ。や、徳さんじゃ」

「心やすそうにおしやる貴方様は、どなたはんでおましたイな」

「お見忘れ、ごもつともじゃ。わしこそ、お見それ申してすまなんだ。先年、大嵐の日に雲の破れから下界へ落ちてナ。それが、ちょうど、お前さんとこの縁先やった。腰の骨打って起つこともでけなんだのを、お前さんご夫婦から親切に介抱してもらて、おかげでようよう、天へ帰って来た……。わしは、あの雷の五郎蔵じゃがナ」

「アアほんに、そういえば、そんなことがおました。そらまアご機嫌さん。すつくり風態がかわつてゐるよつてわからなんだ……。あんた、もう、あの、太鼓もったり、虎の皮の褌したりしなはれしまへんのか」

「アッハッハハハ。なんぼ雷でも、ふだんはあんな風態はせエへん。あれは仕事に出るときだけや。なんぼ雷じゃというて、寒中にまさか裸で暮されやへん……。しかし、下界の徳さんと、まさかこんなところでお目にかかるとは思わなんだが、全体、どないして来なはったんや」

「ヘエ、鰻の天上に連れられて来たんだすけど、途中でふ

り落とされましたんや。だいぶ低い所へ落ちたと思ひましたけど、ここはまだ天でつか」

「さよう。天も三十三天おますのじゃ。これはそのうちで、一番下界に近い中天というところだす。近いうちに、鰻の天上があるという噂は聞いてましたが、アア、それについておいでなはったんか。しかし、振り落とされて幸や。これから上へあがつて、一番上の大宇天不死不生界へ行くまでは、八億の魔性と出会わにゃならん。下界の人なんど、とても命はあらへん」

「そら、こわいことでしたんやなア。ここからやったら大阪へ帰ねまつか」

「まア急にというわけにはいかんがナ。そのうち、折を見て、連れて行たげる。まアわしとこへ来て、ゆつくりと遊んでいきなされ。先年の恩返しや。及ばずながら、でけるだけのお世話はいたしますでなア」

「さやか、おおけに、おおけに……。ええお方に会合たもんや。昔からいうたア、渡る世間に鬼はない……。ア、やつぱりある……」

「なに言うてるねン。サ、こつちイごんせ。(歩きながら) いつも家内とお噂してました。腰骨打って、どうしても歩

けん。難波の伊吹堂へ背負うて行ってもらいましたな。……サ、ここがわしの家や。汚ないけれども、どうぞ遠慮なしに上がつとくなされ……。コレ、お鳴……」

「モシ、おなりて、なんです」

「わしの家内で……」

「ア、なるほど。雷の嫁はんでお鳴か。えらい面白いな」

「ア、お帰り。えらい早よおましたナ」

「いやもう、先方へは行かずに戻ってきたんや。珍しいお方と出会て、お連れ申した。いつもお前に話していようがナ、ホレ、下界へ落ちたときに、いろいろご厄介になった箱屋の徳兵衛さんというお方じゃ。さアご挨拶申せ」

「おオ、これはようこそお越しあそばしました。はじめてお目にかかります。わたしはこの五郎藏の女房で、お鳴と申します。先年はうちの人が、下界でひとかたならずお世話になりましたそうで、なんともお礼の申しようもござりません。今日はまた、思いがけのう、お目にかかれましてうれしいこととござりますが、お一人でお上りやしたんで……」

「いいえ、鰻といっしょに来ましてン」

「まアまアそれはそれは、仲のよろしいこと」

「えッ……なにがだす」

「お内儀とごいっしょで……」

「ちがうちがう。お内儀やない、うなぎだんねン」

「アッハッハハ……。なんでもええ。オイ、お鳴。早幕でちよつと一杯、つけんかい。……ときに、あんた、えらいええときにござった。というのがナ、今日はこの月宮殿のお祭で、なかなかみごとなものやでナ。日が暮れたらご案内するよつてに、下界のみやげに見物していかなせ。それまでは、なにもないけど、まアどうぞ、ゆっくりと飲んどくなされ」

「おおけ御馳走はん。えらい珍しいもんが出てまん。こちの端は、なんでおます」

「つまんでみなはれ。ちよつといけまっせ。霧の三杯酢や」

「ヘエエ。こつちの皿にあんのは」

「ウン、それも下界の人には珍しいかもしれん。稲光を二寸ほどに切つて、塩焼にしたアるのや」

「こつちのは、また、香ばしい匂いがしてますな」

「ア、それは電の油揚げ。そんなんは、みな、冬食うもんやが、前にある小鉢物を、つまんでみとくれ。それはいま